

IU/ℓと高値であった。外科的切除を施行し、病理組織検索の結果、左卵巣腫瘍はチョコレート嚢胞に類内膜癌を併発したものと平滑筋肉腫の混在と診断され、上腹部腫瘍はHHF35による免疫染色陽性であり平滑筋肉腫と診断され、卵巣腫瘍の肉腫成分の肝転移と考えられた。

53. 術前診断が困難であった腹腔内腫瘍の1例

岡部真一郎，大西佳人，桐村拓明
加納麻衣子，中町正俊，山崎武志
藤森基次，松川正明，栗原 稔
(昭和大学豊洲)
熊谷一秀 (同・外科)
佐藤恒信
(千大・保健管理センター)

症例は78歳女性。発熱及び左側腹部痛にて受診し入院となる。血液検査所見ではWBC 10400, CRP16.7と上昇を認めたが、腫瘍マーカーは正常であった。腹部画像診断では、多房性の嚢胞性病変で一部に不整な壁肥厚を認めた。病変は脾臓、子宮、卵巣と連続性なく、血管造影にても新生血管の増生、血管の閉塞は認めなかった。悪性も完全に否定できなかったため、手術を施行したところ、腸間膜に付着した腫瘍との診断となった。

54. 最近当院で経験された腹部結核性リンパ節炎の2例

丸 泰司，古瀬純司，住 一
吉野正曠 (国立がんセンター東)
長谷部孝裕，落合淳志
(同・研究所臨床腫瘍病理)

(症例1) 22歳，男。閉塞性黄疸にて発症。腹部リンパ腫大(＃8, 12)，十二指腸乳頭近傍に潰瘍を認め、潰瘍の生検で類上皮肉芽腫を認めた。胃液培養で抗酸菌発育を認め、結核菌が同定された。

(症例2) 53歳，男。腋下，鼠けい部のリンパ節を触知し，門脈本幹，脾頭部周囲にリンパ節腫大を認めた。

リンパ節生検でランゲハンス巨細胞を伴う肉芽腫を認め、PCRで結核菌DNAが検出された。

2症例とも抗結核薬による治療を開始しており経過は良好である。

55. 当院における在宅医療の現況

秋池太郎，木村雅樹，栗田純夫
(軽井沢病院)
榊原雅裕，宮尾陽一，横山 宏
(同・外科)
真坂とき子，青木加奈子
(同・訪問看護室)

高齢化社会の到来により在宅医療の需要が増大してきており、当院においても同様の傾向を示している。H8. 7～H10.12までの当院在宅患者延人数は91人であり、平均訪問人数は21.5人/月である。疾患内容は、脳血管障害、悪性新生物がそれぞれ24人と最も多い。また、在宅患者のうちの4人に3人が自宅で亡くなっている。今後、患者のQOLを高めることが期待される在宅医療の役割、必要性がますます増大していくものと思われる。

56. 大腸病変を契機に診断された活動性腸結核の1例

多田素久，野瀬晴彦，田中武継
田口忠男，岩間章介，石原運雄
(千葉労災)
今野暁男 (同・病理)

症例。28才。男。腹痛と下痢を主訴に来院。大腸内視鏡検査、生検、注腸X線所見より腸結核を疑い、胸部X線、胸部CTを施行したところ、本症例は活動性肺結核および続発性活動性腸結核と診断された。本症例のように最近、腸結核も軽微な病変で発見されるようになった。ところが、腸管病変からの結核菌の陽性率は高くない。従って、多剤耐性菌の存在など問題点の多い腸結核の画像診断に精通する必要があると思われる。